



衛生学・予防医学講座

知恵を蓄積し、「生を衛る」



主任教授 福島 哲仁

衛生とは、「生を衛る」という意味で、古くから「健康や生命を脅かす病気・ケガから逃れるための知恵」として蓄積されたもので、やがてヒポクラテスらによって「衛生学」という学問に高められました。衛生学の英語訳“Hygiene”は、ギリシャ神話の健康の女神“Hygieia”に由来しています。衛生学・予防医学講座では、予防医学（生活習慣病の発症予防など）、環境医学（農薬や化学物質による生体への影響）、産業医学（労働者の健康と職場環境）、病院などにおける臨床疫学研究など多岐にわたる研究と医学部4年生に対する教育を実施しています。今回は、現在、当講座で精力的に行われている「福島県内除染作業員の労働衛生管理に関する研究」と、13年間続けているユニークな医学部4年生の実習を紹介します。

衛生学・予防医学講座では、実験から疫学まで幅広い分野の研究を行っています。

■福島県内除染作業員の労働衛生管理に関する研究

除染開始後4年間の除染作業員の健康管理の現状および課題について検討しているもので、世界的にも類のない研究として注目されています。東京電力福島第一原子力発電所事故により飛散した大量の放射性物質による環境の汚染が、人の健康または生活環境に及ぼす影響を速やかに低減することを目的に、放射性物質の除染作業が開始されました。2013年に行った調査（回答事業所数98）では、産業医の選任が義務付けられている事業所でも産業医の選任は27.8%と低率で、年2回以上実施することが義務付けられている健康診断（特殊健康診断を含め）が年1回のみと回答した事業所は15カ所も存在

しました。また、健診で基準値を超えた社員には医師の意見を元に必要な措置を講ずることが求められていますが、対応を行っていない事業所は4カ所、非医療資格者が指導を行っているのは1カ所、医療機関受診を促すのみが19カ所と、除染作業員の労働衛生管理の問題を指摘しています。さらに、除染作業員の労働災害についても検討していて、熱中症と蜂等虫刺されが多いことが分かりました。除染作業員の自覚熱中症症状としては発汗、眩暈、筋痙攣、頭痛、全身倦怠感が高率に認められています。現在も研究は進行中で、除染作業員の居住環境やプライバシーなどの問題についても追及し、これらの解決策を関係企業や行政等とタイアップして検討しております。

■家庭健康管理テュートリアル

衛生学・予防医学講座では「家庭健康管理テュートリアル」として実習を始めてすでに13年目となります。この実習は、学生が2人1組になって一般家庭を3回訪問して（図1）「家庭健康管理」を実践で学ぶものですが、多くの発展的学習は「テュートリアル」形式で行われます（図2）。ご協力いただいているご家庭は、福島市内、棚倉町、飯舘村から避難されている方々の仮設住宅と多岐にわたり、学生の評価を各家庭にお願いしており、それをもとに教員から学生にフィードバックを実施し、模擬患者的要素を活かし、教育効果を高めています。最後には、健康や生活問題を解決するための方策を自分たちで考え、3回目の訪問に臨み、いわゆる問題解決を指向した働きかけをし、そのやり取りの相互作用の中で実践的に学んでいます（図3）。



図1



図2



図3